令和３年度地域ケアケース会議における主な議論の整理

テーマ	地域課題	地域での対応方針	市レベルの課題
孤立	・ 孤立や引きこもりに起因する認知機能の悪化や体調不良を訴える方が増えている。 ・ フレイルや認知症の進行が懸念される。 ・ 孤立している人は地域や人との関わりを望まない人もいる。オンラインでの把握は難しい。 ・ 一人になり寂しさを紛らわすためにペットを飼う方が多いが、散歩に行けない、経済的な問題でペットの世話ができなくなるケースがある。また残されたペットの飼育を理由に施設入所に踏み切れないケースもある。 ・ 独居高齢者に配布される救急キットについて、本人の情報が正しく記入されていない事や救急隊や医療機関が救急キットの使用方法を共有出来ていない。	・ 地域で活動されている民生委員のサポートが必要。 ・ 介入を拒否するケースの支援方法の検討。 ・ 従来の方法(訪問、連絡、手紙、等)を今のコロナの時期だからこそ続けることが大切であり、新しい支援方針について様々な視点で考えていく事が必要。 ・ ペット飼育には責任を伴う事を考えたうえでペットとの生活を考えていく必要がある。各機関の役割分担が必要 ・ 救急キットの活用や周知については行政、消防、医療機関等と協力しながら、検討していく必要がある。 ・ 高齢者のネット講座等に代表されるような新しい取り組みを行う。 ・ 飲食を行わず、講話を依頼する等の代替方法を行う。 ・ ICT の具体的な活用方法の検討が必要。 ・ スマホ操作が難しいと感じている高齢者に対して出来る範囲で対応したい。 ・ 自宅で出来る運動の動画配信や悪徳商法の注意喚起のチラシ配布、屋外プログラム等を地域の高齢者に紹介している。 ・ スタンプラリーなど、外出のきっかけになる取り組みを考える事が出来た。	○コロナ禍の新しい見守り体制の構築。 ○コロナ禍においても、閉じこもりや孤立を防止するための対策の検討。 ○市政だよりや回覧板等で、孤立や心身の機能低下を予防できるような情報の発信 ○救急キットの活用や周知方法の検討 ○コロナ終息後における今後の地域活動の検討 ○高齢の方も ICT を活用できる具体的な活用方法
地域交流	・ 外出自粛のため高齢者自身が地域との交流を深められない。 ・ ふれあい喫茶・老人会等が中止になり、代わりとなる高齢者の活動場所が思いつかない。 ・ コロナ禍においてインターネットを活用した交流は必要であるが、高齢者には抵抗がある。 ・ 高齢者が自宅から出ない、誰とも会話が無い等が原因で身体機能、認知面の低下がみられる。 ・ コロナ感染終息後の地域活動について検討が必要。		
ICT の活用	・ 高齢者は ICT に苦手意識があり、すぐには使いこなせない。 ・ 支援者側も多職種連携の場で ICT の活用が進んでいない。 ・ 高齢者側、支援者側においてオンライン環境の整備が必要。	・ 高齢者支援のオンライン環境を整える為に環境面やハード面、スマホ教室等の取り組みが必要 ・ 支援者側も ICT 活用に向けた研修や実践に向けた取り組みが必要。 ・ スマホ等を扱う事が出来るボランティアを活用し、利用普及に繋げる	○高齢者の ICT の利用状況に関する実態把握 ○高齢者のオンライン機器の環境調整 ○高齢者向けのスマホ教室やボランティアを活用した利用普及への取り組みの検討。 ○オンラインを活用した会議や研修の開催
生活困窮	・ 8050、7040 問題を抱える世帯についてはコロナ禍で生活水準が下がった事で生活困窮に陥る世帯が増えている。 ・ 8050 問題や困窮の実態が把握出来ていない。	・ 生活困窮等の複合的で多種多様な課題を持つ世帯を支援する為には専門機関が単独で支援する縦割りの支援ではなく、世帯全体を支援できる支援体制の構築が必要。 ・ それぞれの専門機関が連携を図り、情報共有と横のつながりを継続していくことが必要。 ・ 地域の社会資源を活用していく。 ・ 関係機関の仕組みと役割を学び、世帯を支える仕組みについて検討を行う	○それぞれの専門機関が役割を共有し、横のつながりを活かした支援体制の構築。
見守り	・ コロナ禍前に比べて地域住民・関係機関から高齢者宅への訪問の回数が減少している。 ・ 関係機関同士の連携も希薄になりつつある。 ・ 支援が必要な方の把握とどこまで支援が行き届いているか不透明。	・ 関係機関から地域の高齢者に対して健康相談や困り事の確認を行う ・ 住み慣れた地域で安心して暮らしていくためには課題を抱えた世帯が孤立しない様に見守りや関わりが継続出来る仕組みを地域で作っていく事が必要	○コロナ禍における、地域での見守り体制、支え合える環境づくりの検討。